

円満寺報

第190号

令和4年6月15日発行

天台宗 別格本山 安禅院円満寺

〒220-0061 横浜市西区久保町50-1

電話 (045) 231-4383

FAX (045) 241-4499

http://enmanji-yokohama.jp/ e-mail:enmanji@xb3.so-net.ne.jp

当山副住職、全日仏青理事長就任祝賀会開催さる



理事長就任挨拶を述べる西郊良貴副住職(ロイヤルホールヨコハマ)

安禅院第四十世 副住職 西郊良貴
円満寺第五世

この度、日本最大の青年僧侶の連合体であります全日本仏教青年会の第二十三代理事長に就任するにあたり、ロイヤルホールヨコハマにて四月十一日、理事長就任祝賀会を開催させていただきました。

全国津々浦々から各宗派、各団体の僧侶、円満寺総代の方々、賛助企業をはじめとした一般の方々等約百五十名様にご参加を頂きまして、重ねて感謝申し上げます。当日は全国寺院が加盟する全日本仏教会理事長や世界の青年僧侶の組織であるWFBYの会長からご祝辞を頂いた他、菅義偉前総理大臣からもビデオメッセージを頂き、スクリーンにてご披露をさせていただきました。

新型コロナウイルスの終息はなかなか見えてきませんが、感染予防対策としてアクリル板で感染予防を徹底した上での開催となり、青年会でも本当に久しぶりに対面にて会った方々も数多くいらっしゃいました。

全日本仏教青年会の理事長は大役であり、重責がかかる職務でもございますが、今後もさまざまな縁に感謝しつつ、様々な社会問題に対して青年僧はどのようなべきか、どういった役割を持つのかという点を追求していきたいと考えております。

全日本仏教青年会では全国各地の災害等への支援はもちろんの事、昨今のウクライナ情勢への支援など、国際的な問題に対しても様々な支援を行っている組織でもありますので、そうした活動も折にふれて寺報等でご紹介できれば、と思っております。

東日本大震災の発生以来、天台宗の防災士として、数多くのボランティア活動を直接行ってきた経験を最大限に生かしながら、今後も増信徒の皆様と共に歩んでいきたいと思っております。

祝賀会写真



神奈川・埼玉の青年会が理事長をサポート



菅義偉前総理よりメッセージ



和太鼓演奏も披露された



全国より約百五十名様が集



おてらおやクラブ

重点的に支援

うした家庭に
が報告されて
おります。そ
うした家庭に

後には更にそ
うした家庭の
経済状況が悪
化している旨
が報告されて
おります。そ
うした家庭に

と新型コロナウイルス
ウィルス流行
後には更にそ
うした家庭の
経済状況が悪
化している旨
が報告されて
おります。そ
うした家庭に
重点的に支援

が、支援団体からの報告により
状態にあると報告されております
日本でも子供の七人に一人が貧困
状態であります。

善活動団体です。
当寺も平成二十八年よりこの活動
に参加し、ご法事や大法要の際に頂
戴致しましたお供え物の一部を「お
さがり」として「おすそ分け」させ
て頂いております。

参加・協力しています

円満寺は「おてらおやクラブ」に

を行うべく

「おてらおや
クラブ」で
も匿名での一
人親家庭への

支援といった新しい取り組みも始ま
り、当寺でも従来の支援に加え、新
たな方法も取り入れて支援を続けて
おります。

近年はこうした活動について食品
ロス軽減等の観点からも注目が集
まっているようで、メディアよりお
問い合わせを頂いたり、活動につい
て地域の仏教会・仏教青年会等でご
報告させていただく機会も増えてま
いりました。

こうした活動も、檀信徒をはじめ
とした皆さまのご理解・ご協力が
あってこそであり、ご協力を御礼を
申し上げますと共に、今後も支援の輪
を少しでも広げてゆけたら、と思っ
ております。



送付した「おすそ分け」

盂蘭盆会によせて

今年も盂蘭盆会(お盆)の時期がやってまいりました。大切な行事ですのであらためてお迎えについて書いてみたいと思います。

お盆は御先祖様があの世から帰って来るのでお迎えをする期間、と考えられています。お釈迦様がお弟子さんの母が亡くなった後「あの世で母が苦しんでいるのが見える」と悩むお弟子さんに対し、「母を救う為には様々な供養をしなければ」と説かれたのがはじめです。

お盆を迎えるにあたり、正式には精霊棚と呼ばれる棚を作ります。竹で骨組みを作り、棚の上にもこのころを敷きます。季節の野菜や果物、ナスの牛、キュウリの馬などをお供えます。また、机を用意し、ご先祖様のお位牌や三具足と呼ばれるもの(ローソク立て、線香立て、花立て)を配置して準備をします。そして、お盆の入りの日(正式には十三日)に迎え火を玄関で焚き、盆の終わりにはお先祖様に帰っていただくために送り火を十五日、もしくは十六日に焚きお送りいたします。

悲しいことですが、お身内の方が亡くなってしまった、という場合、四十九日を過ぎた後に迎える初めてのお盆を「新盆(にいぼん)」と呼び、特にねんごろに供養をいたします。田満寺でも毎年、新盆を迎える方には新盆の「供養のご案内を、そでない方にはお盆の「供養のご案内をお送りさせていただきます。

お盆の時には提灯を飾りますが、新盆の場合は白提灯(白く、柄のない無地の提灯)を飾ります。飾った白提灯は翌年に持ち越さず、お盆が終わるとお焚き上げ(お経等で供養しながら燃やすこと)をし処分するのが習わしになっています。一方、柄のついた提灯は毎年飾ってもよい、とされています。

お盆の慣わしはこのようなものですが、地域によって差があります。また、近年は住宅事情により「棚が飾れない」「火が炊けない」「仕事の関係で家族が集まれない」等々、様々な相談が寄せられます。お寺では「正式にできるに越したことはないが、お盆の限りの事をしてあげてください」とお答えするようにしております。

「自分で供養がままならないとお考えの方は、是非お寺やお墓地に足をお運びお参り下さいませ。」(由緒書記)

お施餓鬼会(お盆の大法要)について

田満寺では毎年、七月に施餓鬼会(大法要)を行っております。もちろん皆様の「先祖様を弔うため、先祖供養として」の法要を行って頂いているのですが、「言うとして施餓鬼会(せがきご)というの?」と、単語が耳慣れない方も多いと思いますので今回解説をさせていただきます。

施餓鬼会は、文字通り「餓鬼(飢えた鬼)に施しを与える会」なのですが、どうして飢えた鬼が関係するのかわかりませんが、もともとインドでお釈迦様が説法している時、十大弟子の一人に「阿難(あなん)」というお方がおられました。

この方が、ある晩、静かな所で修行をしていますが一人の餓鬼(恐ろしい姿をした飢えた鬼)が現れ、食べ物を食べようとして口へ運ぶのですが、そうすると食物は火となって食べることが出来ず、絶えず苦しんでいる状態でした。その餓鬼が阿難に「お前は三日以内に死んで、餓鬼道(うけごのちのみち)に行かなくてはならない」と言いました。阿難は大変に驚き、お釈迦様(そのこと)について相談をいたしました。

するとお釈迦様は、「十万の僧を供養せよ。」

とお教えし、阿難は多くの僧侶を集め供養をしました。三日以内に死ぬといわれた阿難は、その供養の功德により長寿を得ることができた、という言われがたいです。

こうした言われに従い、天台宗の施餓鬼会(大法要)ではいつも住職が座っている壇とは別に供養壇(施餓鬼の壇)を設置し、五色の幡(はた)にそれぞれ如来の名前を書いてかけ、壇上には「三界万霊」と書いた大きな位牌を安置し、食べ物やお水をお供えいたします。

これはお釈迦様の弟子である阿難の寿命が伸びた、という事にあやかりまして、「先祖様の供養をする」と共に「壇信徒の皆様(僧侶)の長寿、健康もお祈りをさせていただきます。」法要が施餓鬼会の法要の意義となっております。

「事情により直接法要にご参加頂けない方々にも、こうした功德が届けますように祈念申し上げます。」



施餓鬼壇のイメージ (天台宗公式HPより)

円満寺のお地藏さん近影

円満寺本堂前に菱形の違つ六体のお地藏さんがございます。近所の方々も散策かてらお参りをなさる方も多いこの六地藏ですが、建立されたのは平成十六年。当寺の院代であった久間倉良永様から寄贈されました。(久間倉さんは九十歳を過ぎたこともあり「勇退なされたが、現在も元気に過ごしていらつしゃいます。たまにお寺にお立ち寄り下さっています。)

お地藏様の正式なお名前は、地藏菩薩といい、六体それぞれしぐさの違つお地藏さんが並んでいるのは、仏教の教えで人間が死後行くことされる六つの世界(六道)全てにお地藏さんが赴き救って下さるから、と考えられています。

また斎藤栄子様より手作りの赤い前掛けと頭巾をお地藏様が建立されて以来、毎年「寄贈頂いておりまして、ここに改めて御礼申し上げます。

※ 先日強風にて寶錢箱が破損してしまつたため、現在修理を依頼しております。(写真中央)



自動検温&手指消毒器を設置

書院入口に手を入れて頂くだけで検温とアルコールによる手指消毒ができる機材を設置させていただきました。書院入口につき人の出入りがございまして、冬場は体温表示がやや低くなつてしまつ傾向がございしますが何卒「ご了承下さいませ。

引き続き新型コロナウイルス感染症予防に務めてまいりますので、皆様のご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。



自動検温&手指消毒器

編集後記

前回の円満寺報は原稿を提出し、印刷に移るタイミングにてロシアによるウクライナ侵攻の一報が入つたので記事に反映できませんでした。三ヶ月ほどの月日が流れ、未だに収束の見えない戦争が続いているのはとても悲しい出来事と感じています。

国際的な問題や、大規模災害等の危

機に一人や一寺院が取れる対応策は限りがありますので、地域、宗派、時には宗教の枠をも超えた連合体に参画・協力をし、独自の支援を進めていくという流れが広く浸透しつつあります。

実はこうした動きはかなり以前よりあり、今回、副住職が理事長に就任した「全日本仏教青年会」は一九七七年(昭和五十二年)に現在の形として立ち上がりましたが、その際の名簿を調べると常務理事として住職が名を連ねており、住職にお聞きしても当時から国際的な問題や災害救援に尽力してきたことはいくらでもあります。

一方、そうした活動を世間に対してPRする必要はあまりないので、という考え方をする僧侶もいらつしゃいます。住職は終始一貫「やっている事はごんごんアピールしないと意味がない」というお考えで、円満寺にはその思想が染みついていると思います。

東日本大震災発生以後は、仏教界の支援活動や社会貢献活動の露出や注目が増え、インターネット等を通じて独自の情報発信を行う僧侶も飛躍的に増加しました。情報発信の時に生じるリスクに対する研修や心構えは充分とは思えず、個人的にはいつもヒヤヒヤしっぱなしではあるのですが、「お坊さんはお経を読んでいるだけの存在」という時代はついに終わつていた、と言えるのかもしれない。(良嘉記)